「安藤先生」

―初稿―

2025/6/16

〈人物表〉

山内（やまうち） 芽衣（めい）	（17）	丸バツ高校三年一組の生徒
中村（なかむら） 真帆（まほ）	（17）	芽衣のクラスメート
安藤（あんどう） 邦康（くにやす）	（27）	丸バツ高校の数学教師
山内（やまうち） 洋司（ようじ）	（53）	芽衣の父
山内（やまうち） 紘子（ひろこ）	（53）	芽衣の母

1.

丸バツ高校校舎・廊下（昼）

コツコツという黒板の筆記音。

2.

丸バツ高校校舎・三年一組教室（昼）

授業中の教室。

安藤邦康（２７）、黒板に自分の名前を書いている。

右側頭部に、髪が大きく外にハネて寝癖のようになっている部分がある。

山内芽衣（１７）、その様子を見て呆気に取られる。

安藤、生徒の方を振り向き、眉一つ動かさず、

安藤　「あんどう、くにやすと言います」

×　×　×

チャイムの音。ぼーっとしていた芽衣、ハッとする。

安藤　「三角関数出ない大学なんてありませんからね。不安な人は二年の範囲から復習必要ですよ」

と、教室を出る。

芽衣のノートには、安藤の似顔絵と、大きな余白。

芽衣、髪のハネ部分をぐりぐりとシャーペンで囲む。

中村真帆（１７）、その様子を後ろから覗き込んで、

真帆　「……あれはさ、ああいう髪型なの？」

芽衣、ぐりぐりと囲む手を止める。

3.

芽衣の家・外観（夜）

二階建てのこぢんまりとした一軒家。

窓に明かりが灯っている。

4.

芽衣の家・芽衣の部屋（夜）

芽衣、勉強机に向かって数学の教科書とにらめっこ。

ノートに目を移し、一枚捲ると、安藤の似顔絵。

机の上のキッチンタイマーが鳴る。

芽衣、天を仰いで、ため息をひとつ。

部屋の外から、芽衣を呼ぶ女性の声。

芽衣　「はーい」

5.

芽衣の家・リビング（夜）

芽衣と、山内洋司（53）、山内紘子（53）が食卓を囲んでいる。

洋司、ビールを飲みながら、

洋司「結局は、自分で気づける奴と気付けない奴の差なんだよ」

紘子「ふーん」

と、食べながら適当に相槌。

洋司「全部一緒だぞ。仕事も、学校の勉強も、結局は」

芽衣、黙々と食べている。

紘子「そうねえ」

洋司「営業行くのにシャツの襟立ったままの奴いてな。若いの」

紘子「うーん」

洋司「そりゃ簡単だよ。なんだよそれ、って言ってやんのは。でもダメなんだよ。自分で気づけなきゃ」

紘子「じゃあどうすんの」

洋司「（白々しく）あれなんかいつもと違う？　って」

紘子「あー」

洋司「そしたら自分で鏡見るだろ。結局は」

紘子「へーえ」

芽衣、ハッと洋司を見る。

洋司「そこまですんだよ。こっちもそこまで考えてるわけ」

洋司、ビールを飲もうとして、芽衣の視線に気づく。

芽衣、誤魔化すように食べ続ける。

6.

丸バツ高校校舎・三年一組教室（昼）

チャイムの音。

安藤、教卓の上の荷物をまとめている。

芽衣、教科書片手に恐る恐る歩み寄って、

芽衣「あの」

安藤「はい」

芽衣「さっきのところなんですけど」

と、教卓に教科書を開いて見せて、

安藤「これはまず加法定理を使って……」

説明する安藤、髪がハネている。

安藤「……で、あとはこの式を積分するだけです」
芽衣「先生」
安藤「はい」
芽衣「……何か、いつもと違いません？」
安藤「……？」
　と、ただ芽衣をじっと見る。
安藤「何がですか？」
芽衣「なんていうか……」
安藤「はい」
芽衣「いつもと違うなあと思って」
安藤「いつもと？」
芽衣「はい」
安藤「いつもというのは、いつですか？」
芽衣「え？」
安藤「昨日と比べてという意味ですか？」
芽衣「いや、昨日とは、一緒なんですけど」
安藤「先週と比べてですか？」
芽衣「それも、一緒だと思います」
　と、チラッと安藤の髪を見る。
安藤「じゃあ、どうして赴任してきたばかりの私の、いつもを知ってるんですか？」
芽衣「……それは、なんといいますか」
安藤「別に、いつも通りですよ」
芽衣「そうですか」
安藤「山内さん」
芽衣「はい」
安藤「この問題、授業でも説明しましたよね」
　と、教科書の問題を指す。
安藤「聞いてました？」
芽衣「えっと、その」
安藤「ちゃんと集中しないと、時間の無駄ですよ」
　と、芽衣に教科書を返す。
　その頭、髪がハネている。
芽衣「……すいません」

7.

丸バツ高校校舎・屋上（昼）

フェンスで囲われた屋上に、ベンチがいくつか。
真帆、その一つに座って弁当を食べている。
芽衣、真帆の隣で頭を抱えている。

真帆　「じゃあ、ああいう髪型なんだよ」
芽衣　「そっちの方が困るんだけど」
真帆　「そんなに気になる？」
芽衣　「別に、ずーっと気になってるわけじゃないよ？　頑張って聞こうとしてるよ？」
真帆　「うん」
芽衣　「ただこう、ふとした時に、この人はなんでこんな頭で平気で授業してるんだろうって、沼にハマっちゃって」
真帆　「沼？」
芽衣　「……もう数学ダメかもしれない。私立にするかも」
真帆　「そこまで？」
芽衣　「うん」
真帆　「直接言ったらいいんじゃないの？」
芽衣　「無理だって」
真帆　「……私、言ってあげようか？」

8.

丸バツ高校校舎・廊下（昼）

真帆、安藤と二人で立ち止まって話している。
芽衣、その様子を影から盗み見ている。
真帆と安藤、何やら楽しげな様子。
安藤、声を出して笑い出す。芽衣、驚く。
真帆、安藤の髪のハネ部分を指差す。
安藤、ハネ部分を軽く触る。笑顔。
芽衣、その様子をまじまじと見る。

9.

書店・雑誌コーナー（夕方）

真帆、男性向けファッション誌を開いている。
誌面には、くせ毛風スタイルの男性モデル。
芽衣、覗き込んでいて、
芽衣　「……いや、だいぶ違くない？」

真帆　「でも、これのつもりなんだって」
芽衣　「そう、なんだ」
真帆　「うん」
芽衣　「それで？」
真帆　「あ、そうなんですねーって。ちょっと、あんまりにも気に入ってそうだったから」
芽衣　「そっか」
真帆　「多分、私、安藤先生の中で、髪型褒めてくれた人になってると思うわ」
芽衣　「逆効果じゃん」
真帆　「ごめん」
芽衣　「ううん」
　　真帆、雑誌を棚に戻して、
真帆　「……参考書でも見て帰る？」
芽衣　「うん。三角関数、買わなきゃ」

（おわり）